

美術紀行「タゴールの絵にむかう旅」銀花第74号、文化出版局、pp.74-77、1988

インドが育んだ巨星、タゴールの誕生の地カルカッタから、彼がその理想主義の種をまいた学園村、シャンティニケタンへ。詩人の描いた絵に見せられた人が、旅路での思いを綴る。

絵の中の女たちから見えてくるもの

古びて薄茶色になってしまった紙の上に、サリーを頭からすっぽりと被った女がいる。一人、二人、三人……。どれもが寂寥感を隠せぬまましっかりこちらを見ている。

黒いサリーの女は色調が暗澹としていて、近づいていかないとその目がよく見えないが、赤く滲んだ背景の中に怒りや悲しみをじっとこらえている姿が在る。

「何に怒って、何を悲しんでいるの？」

問いかけずにはいられない衝動を覚えて呟きかける。

もう一人の女の目には意思がある。人間の悪に立ち向かうような、静かではあるが強さをもっていて、善はあくまで善なのだといっているよう。見るものたちがあいまいな気持ちで退治すると、それぞれの愚行が見透かされてしまう。

画家の那覇ラビンドラナート・タゴール(1861-1941)、インド独立前夜の重要な時代を生きた大詩人である。

作曲家、戯曲化、思想家、教育者でもあったタゴールは、晩年の13年間におよそ二千枚の絵を描いた。詩作の書き損じが次第に形をとり、絵の始まりになったという。彼は自らの絵を「線による私の詩作」と読んだ。線と色で綴られた詩のモチーフは、中小、風景、動物(主に鳥)、そしてとりどりの男や女であるが、私は、殊にその女たちに心を強く動かされる。

女たちは「何か」を伝えようとしながら、「どこか遠く」を見つめているような気がしてならない。

「何か」は何なのだろう。

「どこか遠く」はどこなのだろう。

タゴールは詩う。

……

彼女の精神をおしつけている

暗い悪夢から

彼女を救おうとして

……

(「おんみはあらゆる民の心の支配者」より)

インドのヒンズー社会では「暗い悪夢」と呼ばれる因習が男たちの甘えや臆病によって脈々と受け継がれてきた。

たとえば“サティ”。サティはそもそもヒンズー教の女神で貞女の誉れ高く、インド人にはことのほか人気者の名前である。その言伝えにあやかり、夫の荼毘の日に身を投げ後追い自殺をすることがサティと呼ばれ、貞淑な女の道とされてきた。寡婦は不吉と嫌われたので、生きることより死を選ぶことを強制されたという。

また、花嫁の持参金が少ないからと殺害する事件が今も多発している。手を下した夫は浅薄な申し開きでも罪科を問われず、持参金たっぷりの花嫁と再婚できるという。

それにしても、独善的な男たちのつくった価値観が強要される社会では、女たちはいつも黙っているしかなかった。

「何か」は「人間としてささやかでもよい。一人一人の占める場所が欲しい」ということではないだろうか。そして、「どこか遠く」とは「そのことが可能となる“時”のこと」だと思ふ。タゴールの絵から50年の月日が流れ、ニューデリーで昨秋私が出会った幾人かの女たちは、もうその“時”の岸边に辿りついているようだった。

再び、タゴールは詩う。

……

夜があけて、太陽が東に昇る
小鳥は歌い、朝の微風は新しい命をみじろがす

……

(同)

17歳の英国留学から女性の強さや魅力や自由を学んだタゴールは、10歳年下の夫人ムリナリニ・デビを深く愛した。妻はそれにこたえてベンガル語、サンスクリット語、芸術を学び、豊かな感性と識見をふくらませていった。

当時タゴールの実践とインドの女性たちの現実の間には大きなギャップがあったにちがいない。しかし彼は広い視点と思索から女性を理解し、終生インドを愛した知性の人であった。人間を尊厳のあるものとして捉え、その“時”を夢見る女たちが描かれた絵の数々。“ただの絵姿ではない”女たちのまなざしから、インドが、タゴールが見えてくる。

シャンティニケタンの神々に

インドの冬の陽ざしは柔らかい。動物たちが草の上でまどろみ、鳥たちは歌を止め、自然のあらゆるところで静けさが広がっている。「われらのもの、われらの心の愛人」とタゴールに謳われたシャンティニケタンは、カルカッタ発の特急で約3時間の農村地帯にある。道は掃き清められ、行き交う人々も穏やかで、カルカッタの爆発的な喧騒が嘘のように思われてくる不思議な場所である。

百年前、1本の“七葉樹”の木があっただけの荒野は、一人の旅人がその木陰で瞑想に

ふけり深い安息の境地に達したことから、シャンティニケタン（平和のある郷）と命名されたという。その旅人の名はデベンドラナート・タゴール。つまり詩人タゴールの父である。

タゴールは1901年カルカッタを離れ、この地に移り住み、「私の学校」を始めた。生徒5人、先生6人でスタートしたこの学校は現在幼稚園から大学までに発展している。彼の唱える全人教育を目指し、雨の日以外は、マンゴーやバクルの樹陰で野外授業が行われている。

私が「シャンティニケタン」と口にするたび、神聖な気分になり、その美しい響きに魅了され続けるのは、ここがタゴールの創造的な美によって出来上がった学園村であるというだけでなく、そこいら中に棲んでいる神々のせいだと思えてならない。

朝の沈黙。甘やかな光と影。風の吐息。一茎の花の秘やかな匂い。闇の奥から聞こえる生命の慄え。一つひとつが自然のリズムとなって私の生命の調べと同調する。

早朝、タゴールソングが聴けるというので校庭へと急ぐ。冷気の中、小中学生がセーターを着込んで集まってくる。明るく屈託のない子供たちは「AIKO、AIKO」と私の名を呼び、目が合うと手を口に当てて微笑む。ストッキングというものを初めて見るのだろうか、次々と触りにきて歓声を上げている。

そのうち、集合の合図の3連打の鐘の音が止み、会が厳かに始まった。目を閉じて手を合わせると、歌が透き通って聞こえてくる。体が浄化されながらふわりふわりと軽くなる中、まったく唐突に、カルカッタで目撃した女の映像が彷彿してくる。

カルカッタはカオスの町。

近代的なビル谷間で英国風紳士とすれ違ったすぐ後で、うずくまる路上生活者のおびただしい数を見る。ぴかぴかの外国車のすぐ後には、いつ止まってもおかしくないようなぼろぼろのバスが満員の民衆を乗せて走っている。町中が人と車で充満し、空はいつも排気ガスで曇っている。壊れた水道の水で沐浴を楽しむ裸の人々もいる。子供の物乞いにもお目にかかる。

近代と過去。富と貧。清浄と汚濁。それらがひとかたまりとなって渦巻いている。

そんなカルカッタ、ハウラー駅の昼前。彼女は、色あせたサリー姿で長い手を邪魔そうにひざに置き、しゃがんでいた。彫りの深い顔立ちのみごとである。しかし、黒い大きな瞳は虚空を見つめているだけだ。ピーナッツ売りも列車に乗る人も誰もかもが、彼女には目もくれず通り過ぎていく。

タゴールは詩う。

われらの国の大地と水を、空と果物を、甘美にして下さい。神よ！

われらの国の家庭と市場を、森と畑を、豊かにしてください。神よ！

われらの民の約束と希望を、行為と言葉を、真実にしてください。神よ！

われらの民族の息子と娘の生命と心情を、一つにして下さい。神よ！

(「われらの国の大地と水を」より)

神の介在なしでは解決できないことがある。タゴールはそれを知っていた。

子供たちの歌声は続いている。心の中心から指先へと伝わってくるこの感動の一瞬でも彼女の元へ届けたい。タゴールの希いは私の希いとなって、カルカッタめざし空を駆けていった。

解放された精神をもって

黄昏

夕陽を追いかけてシャンティニケタンの周辺を車で走る。ベンガル語は鼻にかかった優しい音の連続で、聞くものをほっとさせるが、ベンガル地方の風景も見るものを同じ思いにさせる。どこまでも見渡せる広野に川は音もなく流れ、辺りの集落からは夕餉の煙がたなびき、そろそろと、一日の終章を迎えようとしている。人間も自然の一部である。

タゴールが求め愛したこの地方は、数枚の絵“LANDSCAPE”に描写されている。この絵にむかうとき、波立っていた心が静まり返り、遙かに過ぎ去ってしまった一シーンを思い出す。

10年前、ベナレスで夫が撮った、一枚の写真「横たわる人」を見た時、私の中の狭い自意識が騒いだ。夫がどのような感性で情景を切りとったのかは知らないが、一切のものを捨て、天地のめぐりのままに自然とぴったりと調和して生きる、精神の解放の姿に思えた。そのことは、価値があると考えてきたことや、他者との比較において肯定するような自分に対しての疑問となり、その時から必然的にインドへの旅が始まっていた。

解放された精神ともって現実を生きるとき、現実もまた違った姿を示すと識り、静かに詩の一節を思い起こす。

心が怖れなしにあり

頭が高くもたげられてあるところに、

認識が自由であるところに

……

(「心が怖れなしにあり頭が高くもたげられてあるところに」より)

太陽が大地の果てに沈み、真暗闇となった。まもなく神々のノックする音が聞こえ、夜の扉が開けられる。

詩の引用及び参考文献

山室静訳「タゴール詩集」(弥生書房刊)